

通信	支部
同 舟	
No. 38 2月号 2月15日編集発行	
東京都宅地建物 取引業協会 府中支部 編集兼発行人 高野豊次	

二月定例理事会開催

とき 二月十四日午後四時より  
ところ ダイワ不動産  
出席者 平井、内山、榎峠、結城、辻、山村、高野、  
五島各理事、加藤監査、栗山相談部長、  
鈴木氏

一、協議又は報告事項

A、山村理事長より今回の支部長会議の模様を次の通り報告あり。  
(1) 定款改正について  
○ 本部入会費五千元 会費月額七百元に改正  
但し会費のうち三百円は支部に戻入する。  
○ 本部役員数の改定(定員減少)

○ 本部各部の統合(部の減少)  
(1) 業協会全国統一について  
全国統一を行う準備委員会を設立することに決定  
(2) 支部規定の改正について  
○ 会費を前納制度に改正する  
○ 監査を監事と名称替える  
B、山村理事長より左の事項に關し諮問あり  
協議の結果次の通り決定した。  
(1) 当支部役員選出について  
選出要領を別項記載の通り決定した  
(2) 総会開催について  
三月二十八日頃定時総会を料亭大國に於て開催することに決定  
(3) 支部会費について  
支部会費を月額千円に改定する(内七百元は本部納入)  
当支部入会費は従来通り一万円とすることに  
変りなし

理事及び監事選出要領

昭和四十二年四月より新たに就任する当支部理事及び監事の選出要領を次の通り決定する

- 記
- 一、理事選出は各地区毎に行う。その選出定員及び選出事務を担当する世話役は別表の通りとする
  - 二、理事の選出は各地区毎の世話役により二月末迄にこれを行い、三月始め支部に報告する
  - 三、監事は各地区毎よりの選出を避け会員の最も多い中部地区より一名を選出する
  - 四、新たに選任された理事の内より支部長及び副支部長を互選する

地区	理事定員	監事定員	世話役
東部	三	一	辻金吾・吉野亥之太郎
中部	五	一	加藤武・榎峠優・加藤友三郎
西部	二	一	平井進二郎・山岸正治
稲城	三	一	五島徹夫・吉田末吉
計	一三	一	

人 と 店

紀ノ国屋不動産府中駅前支店が昭和四十年十二月に成立不動産と命名替えをし新たに発足した。  
成立不動産の成立とは仏教語にもあり又契約が成立するという意味を持つ洵にゲンの良い店舗名ともいえるよう。  
経営者は加藤繁子さん(加藤政五郎氏長女)で成徳女子商業の出身である。  
こゝで女性に年令を聞くのもやぼったい話だが取材の順序として聞かざるを得ないので恐る恐る聞いてみると大正十二年生れといふ未だ独身の模様である。  
年に似合わず若作りで人さわりが良く一面棄て家の様でもある。そして繁子さんは新橋で十年の長きに亘りマネージャーをやり市ヶ谷で経営学などを勉強したというので不動産業としての経験は浅いが店の経営そのものは実に地についたものがある。  
取引主任者は伊藤稔君で店が駅前の関係から貸家貸問の取扱いが数多く概ね店の経費はこれで賄いうるというから洵に結構な話である。

土地斡旋に対する元付けは大国一族でやりこの店は主としてその販売面を担当するシステムを取つておるので従つて業務は常に多忙、業績も至つて順調である。彼女は不動産は未だ不勉強で苦勞が多いというが、店は良く整頓し女性の身でよくもあれ丈の切廻しが出来るものと感服せざるを得ない。今後も持つて生まれた人柄を生かして自重自愛更に健斗を祈る次第である。

### 一口随想 秘書 (四)

東京に家族を置き局長独りで単身大阪に赴任してくる人もいる。

こういう方は大抵大阪と神戸の中間にある芦屋あたりの高級アパートに止宿することが多いが室内にはジュータンなど敷き込み応接間から浴場までであるという豪華なアパートで従つて賃料も高い。

然し何分一人身のためこのアパートに帰るのは月の内十日位で後はどこかでシケ込むという寸法である。そのシケ込む先が北の新天地とか南地あたりだとすると随分金のかゝることである。

こゝで早急に書類の決裁を買わねばならないものがあり恐る恐る件のところへ出向いてみると昼のさなか

に芸者のひざ枕で楽しんでおるではないか!!こんなところを見せ付けられては高級官吏も正に台なしである。だが秘書としてはこうしたブライパインの事柄は絶対に口外してはならないのですべてが見ざる聞かざる云わざるである。

又面白いことが一つある。

南地での芸者置屋でたべたという一塩ものの鯛のお茶づけが忘れられず遇々紀州白浜へ出張した折、宿屋のご馳走が気に入らず例のひと塩ものの鯛でお茶づけがくいたいと云い出した。仕方がないので十キコも離れている田辺町まで夜中人を派しひと塩ものの鯛を買つてきたがそれがなんと夜の十時すぎ、早速コンロをお座敷に持出して焼いて差上げたがすぐく味がまじいとたつた一匹しか召上らなかつた。目黒のサンマと同じ様な話である。

南地あたりでたべる鯛と田舎町で出来る鯛とは同じひと塩ものでも自ら味の違うのは当り前であるのにそこに気がつかなかつたのはお殿様か坊ちやん育ちに違いない。

最近大臣がお国入りした際公私を混同して問題をかもしているのが高級官吏にも大なり小なりこうした混同はあるもので内情を実地で見ている秘書としては又止むを得ないといひ得ることも多分にある。

### 同舟の編集者を募る

高野生

支部通信紙同舟は昭和三十九年四月創刊号を出してから丁度三年になる。

この間私が三ヶ月病氣して執筆が出来なかつた以外には拙い乍らも筆をとりどうやら編集を続けてきた。然し常に原稿が少いので色々と苦心し各位の投稿を希望するやら依頼したこととも一再ではなかつたが僅かに府中開発の吉野氏と金子商事の金子氏が投稿をくださっただけでいつも乍ら寂寥の感を深くしたものである。

唯私一人の筆だとすると、いふなれば一種の型がきまつてしまい各位にあきがないかをおそれるものでこの辺で後に続く者にバトンを渡したいと考えている。尤も人は批評こそすれ貧弱乍らも長期に亘つてこうしたものを作りあげるといふことは並大抵のことではなく、いつも重荷を背負つておる様なそして責任感で一杯で、この気苦勞丈でも各位に聊か御奉公が出来たと内心喜んでおる様な次第である。

そこでこの三月には理事の交替でもあるのでこれを機会に報道の方もご免を頂ければ私にとり何よりの幸いと思ふ。

然し乍ら三年も続いた同舟であるので私が辞退したといつて後に続く者がなくこのまゝ立消えになる様な

ことがあれば洵に遺憾であるのでそこは是非ともバトンを受けついで貰う人が実現してほしいものである。府中開発の吉野氏あたりに白刃の矢を立てたいが、更にまたおれがやつてやるという篤志家があるならばこの上もないことと思ふ。

何卒各位の絶大なる御配慮を願う次第である。

### 編集後記

○二月に入つてとんでもない雪が降り喜ぶ者は子供と犬ばかりである。

○私の眞の友人が今回なくなつたが、人間葬式を出して始めてその人一代の幸不幸が決定するといふ。むべなるかな。立派な葬式に会葬者は五百名に達し、彼の一生をたゞえるにふさわしい終末であつた。

○同舟を全然読まない人があると理事長はいふ。こんな僅かなものを読まないのなら新聞はおろか、週刊誌なども読まないであろう。

もつてその人の人柄を疑いたい。

昭和四十二年二月十四日夜しるす

高野